

## 路上観察により都市と建築を一般社会と繋げた先駆的業績

赤瀬川原平殿

赤瀬川原平氏は、1960年代の“ネオ・ダダ”の活動により戦後美術界に大きな足跡を残し、また、1981年『父が消えた』により芥川賞を受賞するなど、画家であり作家としての多彩な活動は高く評価され、一般にもよく知られている。建築界との交流は、“ネオ・ダダ”時代に遡るが、とりわけ注目すべきなのが、1972年の“トマソン”の“発見”と、その後に“路上観察学会”（1986年結成）に繋がっていく活動である。“トマソン”とは、昇っていても入口の無い階段（不要になりドアが塗りつぶされてしまった）とか、町の中に忽然と立つ古い煙突（銭湯本体が壊された）とか、石の塀に口を開ける唐破風付きの郵便受け（戦前、石工が彫ったが、戦後、郵便物の大型化により使われなくなった）とか、日頃は気付かないが気付いてみると興味深いさまざまな物件を指す。

経済的な合理性のみを追求してきたように見える現代都市のあり方の中に、都市の記憶を思い起こさせる、あるいは機能主義一辺倒では理解不能な様々な思いや味わいをみせる不可思議な物件を“発見”したこと、それを“トマソン”と命名し、広く社会一般の注意を喚起させたことは、大きな功績である。都市は、成長の過程でさまざまなものが無用化してゆくし、そうした中から計画されざる新しい空間が生まれ出たりもする。単に珍しい物を発見し、賞味し、楽しみとるように見えて、現代建築のあり方、現代都市のあり方に警鐘をならすものでもあった。

そして、建築史家の藤森照信氏ほかとの“路上観察学会”につながった活動は、とにかくフィールドを歩く、という建築をつくるものの原点を再確認させてくれた点に大きな功績がある。同じころ、1970年代初頭に多くの若い建築家たちは“デザイン・サーヴェイ”と呼ばれるフィールドワークを展開したのであるが、関東大震災直後の今和次郎の考現学はその先駆である。建築にとって最も大事なものは現場である。

さらに、ディテールへの拘りもまた大きく評価できる。建築のみならず建築に付属する門塀や郵便受けや動植物装飾やマンホールの蓋などにも、建築界の視野を広げることとなったのである。

同氏が先導してきた路上観察の活動は、以上のように、日本の建築界にとって貴重な貢献をなすものであり、世界的に見ても都市と建築に関する未開な領分に、先駆的に着目した活動として高く評価できる。同氏は、現在もなお新聞連載及び著書により、都市と建築について一般社会に発信し続け、日本建築学会文化賞にふさわしい業績である。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。